



おおしょう

尼崎市立大庄小学校

学校だより NO. 4

H30. 7. 2

和の心 世界に通じる

ワールドカップロシア大会が開催されています。その中で前回のブラジル大会に続いて今年も、日本からの応援団(サポーター)には、全世界から賞賛の声があがっています。それは、試合が終わったあと、自分たちの観客席で出たゴミを拾って回ったことです。要するに後片付けをきちんとして帰ったという話です。今回の大会では、その行為が他の国の応援団(サポーター)にも広がっています。「立つ鳥跡を濁さず」ということわざにもあるように、応援は精一杯行い、試合に勝とうが負けようが気持ちよく会場をあとにする。そんな日本人の心を世界に発信し、広がりを見せていることは素晴らしいことだと思います。

この日本のサポーターの行動は、日本がW杯に初出場した 1998 年フランス大会からだそうです。外国の人たちには驚きの行為としてとらえられました。それは学校教育の違いだと考えられます。日本の学校では自分たちの教室やトイレ等も、自分たちで掃除をするということが通常です。集団で協力して、時間内にきれいにする。この考え方は、おそらく日本中どの学校でも共通していると思います。かたや、外国では学校の掃除といえども、プロの清掃業者の仕事であり、大人も子どもも業者がやるのが当然という考え方です。それを日本のように、子どもが自分たちで掃除をするなどということは、驚きとしかいいようがないことなのでしょう。

アルゼンチンでは「世界には私たちとはかけ離れた習慣を持つ国もあるが、多くの文化が一堂に会するのも W 杯の美しさだ」と新聞で報じられ、チリでは「日本の子どもは幼いころから学校の教室を掃除している、それが公共の場所をきれいに保つ規律やリスペクトにつながっている」とニュース番組で解説されています。

われわれは、ふだん当たり前のように子どもたちに掃除をさせ、時には厳しく指導します。しかし、この教育の成果こそ「日本人がきれいに使う」「きれいにする」というごく当たり前の行動が自然と身についている証です。そういった教育が全世界に広まれば、日本のきれいな心も伝わるような気がします。



(校長 峯本千鶴)

